



心温まる3分間スピーチ 息子とともに子猫を救う

新庄徳洲会病院（山形県）は朝礼時、職員による3分間スピーチを実施している。そのなかで同院ピノキオ保育園の坂上節管理者が、息子さんとともに子猫の命を救ったエピソードを発表。心温まる内容だったため、一部抜粋し紹介する。

1週間ほど前、私の車の下で1匹の子猫が伸びていました。手足を硬直させ、首を不自然に後方に反らせ、明らかに瀕死の状態。猫を飼ったことのない私は扱いにとまどいました。

「明日、車を出すまでは、このままにしておこう」

しかし、夕方に帰ってきた息子がその猫を見つけ、安全な場所に移して世話を始めました。スポイトの代わりにストローで水を吸い上げ、口に垂らしてみたり、^{けいれん}痙攣する姿を見て「脳の病気かな？」と病名を考えたりしていました。息子は子猫が夜間に動物に襲われることがないよう、囲いをつくりました。

次の日から、息子も私も仕事が終わると真っ先に猫の様子を確認するようになりました。おながか上下している姿を見て、「よかった、生きてる！」。

3日目、ようやく垂らした水を飲むようになりました。その後、横に伸びっぱなしだった態勢がうつ伏せスタイルになり、少しずつミルクも飲むように。

そして5日目。子猫は囲いから抜け出して、2mほど移動したところに猫らしい姿で座っていました。

「明日あたり、いなくなっているかも」

息子の言葉どおり、6日目の朝にはいませんでした。

その日は23歳になる息子とビールで乾杯。死んでいくものと諦めていた野良猫が、生きて巣立ったことを知った充実感と安堵感は格別です。それとともに、^{あきろ}投げ出さず世話をし続けた息子をとても誇らしく思いました。

私は必死に子育てをしていたつもりですが、この子もまた親育てをしていてくれたのだと、深く感謝した出来事でした。